

スペインとFEALAC (東アジア・ラテンアメリカ協力フォーラム)

Spain and FEALAC (Forum for East Asia-Latin America Cooperation)

細野 昭雄 神戸大学経済経営研究所教授

HOSONO Akio Professor, Research Institute for Economics & Business Administration, Kobe University

プロフィール

昭和37年3月 東京大学教養学部卒業
4月 アジア経済研究所調査研究部研究員
41年 国際連合ラテンアメリカ・カリブ経済委員会(ECLAC)に出向 経済研究官
平成元年 筑波大学社会学系教授
6年～8年 副学長
9年～12年 筑波大学国際政治経済学研究科長
12年～ 神戸大学経済経営研究所教授
13年～ 日本国際問題研究所アメリカ研究センター客員研究員を兼ねる
現在、『東アジア・ラテンアメリカ協力フォーラム(FEALAC)「経済・社会」ワーキング・グループ(WG)に関する提言案作成のための研究会』主査。論文・著書多数。



スペインのバルセロナは、この国の経済の中心地の一つで、とくに製造業が盛んであり、日本の対スペイン向け投資の最大の投資先でもある。ここにスペイン外務省、カタルーニャ州政府、バルセロナ市の協力により、カサ・アジア（スペイン語での発音では、カサ・アシア）が昨年11月に設立された。マドリッドに設けられたカサ・デ・アメリカの姉妹機関であるが、スペイン政府のアジア太平洋プランおよびEUのアジア新戦略の目的を達成するために設立されたとされる。

このカサ・アジアが、設立1周年にあたる本年11月に、スペイン・ラテンアメリカ・アジアの関係推進に関するセミナーを開催した。米州開発銀行（IDB）のイグレスias総裁も出席し、アジア、ラテンアメリカ、ヨーロッパからの外交官、学者が多数参加した。スペインを中心にヨーロッパとラテンアメリカの関係は歴史的にも強いが、さらに近年、イペロアメリカサミットの開催や、EUメキシコFTA、EUチリFTAによる経済関係強化、スペイン企業の投資の急拡大等で一層強まっている。これに対し、ヨーロッパとアジア、アジアとラテンアメリカの関係は相対的に弱い。スペインを始めとするヨーロッパと、ラテンアメリカとアジアの3者の関係を強めるにはどうすべきかというのが、主要なテーマであった。

ヨーロッパとアジアの関係を強めるための組織としてはASEMがあり、活動を行ってきている

が、アジアとラテンアメリカの協力の組織としては、FEALAC（東アジア・ラテンアメリカ協力フォーラム）ができたばかりである。FEALACの発足の経緯、その目的、意義、組織、第1回外相会議で設けられた三つのワーキンググループなどについて、詳細な説明を筆者が行ったが、他にも、ホルヘ・アルベルト・ロソヤ氏（イペロアメリカ協力事務局長）、マンフレッド・ウィルヘルミー氏（チリ太平洋財団事務局長）、ホアン・ホセ・ラミレス・ボニージャ氏（コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学教授）、イグレスias IDB総裁が言及し、FEALACが次第に関係者に知られるようになってきていることがわかった。スペインからの参加者が圧倒的に多かったが、FOCALAE（FEALACのスペイン語での略称）が、スペインで初めて紹介される会議となったと思われる。

FEALACは、日本でもあまり知られていないとはいえない。以下、FEALACについて説明し、日本の役割について言及することとしたい。

FEALACは1998年10月に、シンガポール首相のゴーチョクトン氏が提唱したことに端を発している。1999年9月には、シンガポールで第1回会合が開かれ、さらに2001年3月には、第1回の外相会議が、チリのサンチャゴで開催された。この外相会議で、基本的なFEALACの枠組みが定められ、また、FEALACという名称も決定し、加盟国も東アジアから、15カ国、ラテンア

メリカから15カ国と決まった。東アジアの15カ国には、ASEANプラス3（日本、中国、韓国）のすべての国が加わっており、その13カ国にオーストラリアとニュージーランドが参加している。ラテンアメリカ側は、主催国で、当初からラテンアメリカ側の取りまとめ役をつとめたチリを始め、メルコスルの4カ国（アルゼンチン、ブラジル、パラグアイおよびウルグアイ）、アンデス共同体諸国（ボリビア、コロンビア、エクアドル、ペルーおよびヴェネズエラ）、メキシコ、中米のコスタリカ、エルサルバドル、パナマ、それにキューバからなる15カ国が参加している。

FEALACの設立によって、東アジアとラテンアメリカ諸国が直接対話を行うフォーラムが設けられたわけであり、その意義は大きい。この点について、サンチャゴの外相会合のコミュニケも「FEALACは、両地域の政治、文化、社会、経済および国際問題における共通の関心事についての対話と協力を開始するという画期的意義を有している」と述べている。そして、「相互関係の緊密化した、グローバルイゼーションが進む世界における挑戦と機会に取り組んでいかなければならない両地域の絆を強めるであろう」と述べている。

外相会合では、FEALACの将来の活動に関する、原則、目的、方法を定めたフレームワーク文書が採択された。また、三つのワーキンググループが発足することとなった。それらは、政治・文化、経済・社会、教育・科学技術の三つである。ワーキンググループは、FEALACがまだ生まれだての組織であることから、今後、FEALACのなかでいかなる具体的プロジェクトを実施していくのかにつき、議論する必要から発足したものである。2002年には、各ワーキンググループの第1回会合が開催されており、2003年に開催予定の第2回会合では、第1回会合で議論された現状分析を踏まえて、具体的な提言を含む最終報告書を作成・合意する予定となっており、この最終報告書は2003年にフィリピンで開催される予定の第2回外相会議に提出されることとなっている。

この第2回外相会議で具体的な活動に向けた提言が議論され、そのいくつかが採択されることにより、FEALACの枠組みのもとで、東アジア、ラテンアメリカ両地域の関係の緊密化や、さまざ

まな共通の課題に関する経験の交流などが行われていくことが期待される。以下、経済社会ワーキンググループのケースについて、やや詳しく紹介しておこう。

日本は第1回外相会議で、ペルーとともに、経済・社会ワーキンググループを主催することに合意した。その目的は、両地域の諸国が抱える経済社会分野における共通の課題を見極め、その実情を調査し、相互の経験を共有し、将来に向けていかに両地域が協力関係を強化していけるかについて具体的な提言を策定することにある。

この趣旨に基づき、日本とペルーが共同議長国となって、このワーキンググループの第1回会合が2002年3月東京で開催された。日本を含む東アジアとラテンアメリカから29カ国が参加した。

この会議に先立ち、日本国際問題研究所（JIIA）に日本のラテンアメリカおよびアジア研究者からなる研究会が設けられ、両地域における経済社会の現状に関する分析が行われ、第1回会合に向けての報告書が用意された。会合では、各国代表の間で、「制度とガバナンス」「経済発展と貧困」「企業家精神と中小企業」「IT革命と途上国」の四つのテーマについて活発な議論が行われた。

続いてこの研究会では、ワーキンググループの第1回会合での議論を踏まえ、具体的な提言について検討を行い、現在その取りまとめが行われつつあり、ワーキンググループの第2回会合ではその提言などを参考に議論が行われることとなっている。

ところで、アジア諸国のなかで、ラテンアメリカとの経済関係がもっとも強いのは日本である。90年代、とくにその後半、スペインを始め欧米諸国の直接投資が急増したことから、日本の投資の相対的割合は低下したとはいえ、メキシコを始め製造業を中心に、一部の国で投資の拡大もみられている。また、ラテンアメリカの多くの国で、ODA供与国としての日本の比重は高い。ラテンアメリカ諸国には、日系人も多い。

したがって、FEALACにおける東アジアとラテンアメリカの協力に向けての対話、具体的な協力のプロセスにおいて、わが国は積極的な役割を果たすことができるはずであり、また、それが期待されていると思われる。